

氏名（本籍）	マツ ムラ コウ タ 松 村 公 太（奈良県）
学位の種類	博 士 （文化財）
学位記番号	博 美 第 239 号
学位授与年月日	平成20年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉破壊されたアフガニスタン・バーミヤン西大仏天井壁画西壁「菩薩と天人たち」（部分）の想定復元模写 〈論文〉アフガニスタン・バーミヤン石窟壁画に関する模写制作を通しての研究
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教 授 （美術学部） 田 淵 俊 夫
（論文第1副査）	” 客員教授 （ ” ） 有 賀 祥 隆
（作品第1副査）	” 教 授 （ ” ） 宮 廻 正 明
（副査）	” 准教授 （ ” ） 早 川 泰 弘
（ ” ）	アフガニスタン文化研究所 所 長 前 田 耕 作

（論文内容の要旨）

### 研究目的

本研究では西大仏天井壁画西壁『菩薩と天人たち』（部分）の再現模写、流出文化財として保護され熟覧が可能な壁画断片の調査・現状模写を行い、それらを踏まえた上で西大仏天井壁画西壁『菩薩と天人たち』（部分）の想定復元模写を制作する。

破壊され、実物を保存することが不可能となった壁画を想定復元し、絵画としての実体をもった記録を残すことが本研究の主目的である。また、制作過程で得られた材料・技法に関する研究成果を提示し、制作を通して伝統的な絵画技法を作品とともに伝えていくことができる。

### 研究意義

アフガニスタン芸術は仏教造形の初期の状態を示す文化遺産としても大変貴重であり、西域から日本へと伝播した仏教美術の源流を知る上でも重要であるといえる。しかし科学調査やデジタルによる記録が進む一方で、絵画としての研究は立ち遅れているのが現状である。本研究は様々な材料・技法について検証した上で模写を制作する。従来の美術史研究とは違った実技的な立場から研究を進め、バーミヤン壁画の絵画的研究の活性化につなげたい。

また、本研究は原物が無い状態から作品を蘇らせるという点で画期的な試みである。写真記録は忠実な図様記録には適しているが破壊され現物が失われた作品については絵画材料、技法を総合的に保存継承する「模写」が必要となる。同壁画は紛争による破壊後も危機的状況が続き、保存が急務である。欠損図像と彩色を想定した復元模写を作成することで、壁画の文化的・美術史的史料価値の回復と保存を目指す。

伝統的な日本画の材料・技法を用いて世界的な文化遺産の復元を試みることは、日本画家としての挑戦でもある。模写制作にあたっては画家の能力を最大限に活かし、生きた絵作りを常に心がける。単なるコピーではなく伝統技術・精神を後世に伝える模写作品を制作することこそが、画家が模写研究を行うことの意義であると考えている。

## 研究方法

パーミヤン壁画はおよそ1500年前、天然の絵具と膠着材を用いて描かれたもので、千数百年の伝統を持つ日本画はそれに非常に近い材料・技法を現在まで継承してきた唯一の絵画技法といえる。本研究ではこうした歴史的裏づけを持つ日本画の材料を用い、作画技法や画材の特質を熟知した視点から当時の制作者の立場に立ち、研究を進める。

絵画技法をこれと限定することは難しく、本研究で提示するのはあくまでひとつの可能性であるが、作品という具体的な形で完成させることで、実技・材料に関する実証を伴う研究となる。このような研究方法は、歴史学からの考察や科学的原本調査に加え、材料の実験検証を踏まえた上で材料・技法を推測し、それを絵画として具現化するという新たな研究方法といえる。

## 図様再現についての研究成果

西大仏天井壁画の復元模写制作にあたり必要となるのは、欠損している菩薩と天人の顔、手、足、衣、へそ、龕の花綱文様の図様再現および全体の彩色の再現である。図様再現については以下のような手順で行った。手に入る数少ない写真資料では補いきれない点について、独自にデジタル技術を活用したことも本研究の特色のひとつである。絵画として最終的には人の手で仕上げるのが重要であるが、こうした技術の活用は、一気に壊滅的危機に追い込まれたパーミヤン遺跡のような文化財を復元、保存する為に非常に有効であるといえる。

## 材料・技法についての研究成果

- ・白色下地については文献や調査報告からは石膏である可能性が高いとされてきたが、本研究においては自然条件、性質の面から絵画材料として最も適していると考えられる石灰を使用した。この実験過程で石膏と石灰の性質の違い、壁画下地として塗布する為に適した形状や塗布方法について明らかにすることができた。
- ・パーミヤン壁画は従来西洋のフレスコ技法と混同されることが多かったが、本研究では日本画と同様のセッコ技法によるものであると仮定し、主に日本画の伝統技法・材料を用いて模写を制作した。礬水によるサイジング処理や膠を膠着材とした彩色が壁画制作に適していることを確認し、パーミヤンと日本の絵画の間に図像や文様の類似だけでなく、技法や材料の面でも深いつながりがあることを提示した。
- ・彩色の再現にあたって、様々な天然素材を試しながら色材を選定した。例えば身光に見られる緑褐色など、写真資料や現地調査からは未だ解明されていない色料についても、想定と塗布実験を行い様々な可能性を示唆した。最終的には配色のバランスや視覚効果などの面から、絵画としてふさわしい色を選び、制作当寺の鮮やかな彩色を復元することができた。各色料の特性や変色条件についての新たな発見があり、絵画研究として非常に有意義であった。
- ・パーミヤン壁画からは質の高い線描や朱線による下描き、重ね塗りや隈取りの描法など、アジアの優れた仏画に共通する特徴を多く見出すことができた。それらの優れた絵画的要素を作品から読み取り、模写によって実体のある絵画として復元した。
- ・流出文化財の熟覧を行い、貴重な現存資料から得られる絵画情報を詳細に記録した。作品とともにこれらの記録や技法に関する所見が、今後の壁画研究の一助となれば幸いである。

## 総括

研究に際しては壁画の現物が破壊されていること、現地調査が行えないことなど、様々な制約があった。しかし幸いなことに、流出文化財として保護された貴重な現物資料を熟覧する機会に恵まれた。伝統的なアジアの絵画技法材料を継承する日本画を学ぶ者として、この機会に模写の技術を文化財保存に活用すべきであると強く感じ、模写制作を決意した。

制作中も、現物の無いものを復元する難しさに何度も直面したが、実験・検証を重ね、不明な点が多かったバーミヤン壁画の材料・技法について多くの発見があった。欠損部の図様と彩色の想定復元では、現存する作品や残された写真資料からサンプルを収集し、絵画的に自然で美しい図様を再現することができた。

はじめは外国人である自分が他国の文化財の研究をするという事には抵抗や迷いがあった。しかし、日本画とバーミヤン壁画の間には、材料・技法・文化背景などの点で多くの共通性を見出すことができた。国や地域にとらわれず広く東洋の絵画として研究と保存に携わる姿勢が、これからの日本画研究にとっても重要であると言えよう。日本は東洋画の伝統技法と、良質の天然絵画材料を世界で唯一、現代まで守り続けている。日本画の道具・材料・技法によって、アジア文化圏の仏教遺跡であるバーミヤン壁画を研究・復元することには十分な意義と根拠がある。本研究では、模写作品によりそれを立証することができた。シルクロードを経て日本に伝えられた伝統絵画技術を、今度は日本から世界に発信し、文化財保存に貢献することが求められているのではないだろうか。